

氏 名 (本 籍)	吉 川 直 世 (熊本県)
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	博 乙 第 175 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 59 年 2 月 29 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
審 査 研 究 科	文 芸 ・ 言 語 研 究 科
学 位 論 文 題 目	L'article et le problème de la référence en français (フランス語における冠詞と指示の問題)
主 査	筑波大学教授 文学博士 佐藤 房 吉
副 査	筑波大学教授 文学博士 安 井 稔
副 査	筑波大学教授 松 本 克 己
副 査	筑波大学教授 芳 賀 純

論 文 の 要 旨

本論文は現代フランス語における冠詞と指示の問題を包括的に解明しようとしたものであり、その構成は以下のとおりである。

第 1 部 冠詞と総称名詞句

第 1 章 いわゆる総称名詞句

第 2 章 冠詞の時間・論理的体系 (système chronologique des articles)

第 3 章 ゼロ冠詞か冠詞の欠如か

第 2 部 指示(reférence)と記述(attribution)

第 4 章 名詞句の指示機能と記述機能

第 5 章 不定名詞句における特定性の概念

第 6 章 冠詞の指示機能と記述機能

第 7 章 関係詞節の指示機能と記述機能

結 論

第 1 部は、フランス語における冠詞の用法のそれぞれの本質の解明にあてられている。

第 1 章においては、文脈に応じて、le N, les N, un N のいずれもが、ほぼ等価的に総称の価値を有し得、かつ、le N がその典型的用法であるとする現行一般の名詞句論乃至冠詞論に論駁を加え、

真に、あるいは、典型的に総称名詞句であり得るのはles Nであることを、この三つの型の総称的用法の「統辞論的行動」(comportement syntaxique)の詳細な検討によって論証しようとしている。

筆者は、「総称」(généricité)とは、あるクラスに属する構成個体の総和を指す概念であり、したがって、必然的に、内的複数性(pluralité interne)の観念を含み、またしたがって、本質的に、非指示的(non référentiel)、非連続的(discontinu)であるという概念規定を行い、この条件のこごとくを満たすものとして、真に総称の名に値するものはles Nであるとする。これに対して、le Nは、その観念的個体(entité)性によって、指示的(l'homme/le dieu)、かつ連続的(continu)であるが故に、総称とは次元を異にし、un Nは、その本質において個別的指示であり、その総称的価値は、ある種のモダリティ表現(否定、法助動詞のdevoir, pouvoirの介入、条件法の使用など)を条件として、かつ、les Nを先行とした後行としてのみ成立するものとされる。

第2章においては、前章で行われたle N, les N, un Nの帯びうる総称的価値の分析結果を起点とした、総称的・非総称的用法のすべてにわたる、すべての冠詞のすべての用法の新たな体系化が試みられ、「冠詞の時間・論理的体系」(système chronologique des articles)の名とともに、下に示すように図式化されている。

「時間・論理的」とは、時間的には先行・後続の關係に、論理的には因・果の關係にあることを総合した概念であり、ここでchronologiqueとはchronogico-logiqueに外ならない。

langue	discours						
	pré-extensité		extensité				
	pseudo-générique		générique	gén.	non-spéc.	spéc.ind.	par.
			<i>les N</i> ···· <i>les N</i>	<i>un N</i> ····	<i>un N</i> ····	<i>un N</i>	<i>le N</i>
	<i>φ N</i>	<i>le N</i>			<i>des N</i> ····	<i>des N</i>	<i>les N</i>
				<i>du N</i> ····	<i>du N</i>		<i>le N</i>

筆者はここでまた、筆者の分析によれば、総称にも非総称にも属さず、かつ、理論的にles Nに先行すべき、φN, le Nの占める位置を示すため、G. Guillaume(1973)の設定したextensité(外延度)という概念はpré-extensitéとextensitéとに二分されなければならないとしている。

第3章は「ゼロ冠詞」(G. Guillaume, 1969)の批判的検討にあてられ、「ゼロ冠詞」は客観性を有せず、その実質は、ラングにおける名詞(nom de langue)の、パロール乃至ディスクールにおける名詞の非範疇化(décatégorisation)にとどまるとしている。

筆者が挙げている、その最大の理由は、無冠詞名詞は、名詞が十全に名詞性を発揮している主語の位置を占め得ないという統辞的事実である。

第2部は、名詞句における指示機能(*fonction référentielle*)と記述機能 (*fonction attributive*)の関係の解明にあてられ、冠詞および関係詞節の、この観点からの機能分析を行っている。

第4章では、Donnellan(1966)が指摘した定名詞句における指示的用法(*usage référentiel*)と限定的用法(*usage attributif*)に関し、両方の用法がほとんどすべての定名詞句に見られるとするCole(1978)の説を拒け、それらが明瞭に観察され得るのは、——照応関係が潜在的な事例をも含めて——「後方照応定名詞句」(*SN défini cataphorique*)に限られることを論証し、併せて、Donnellanが定名詞句のみについて指摘しているこの対立関係は、不定名詞句についても、その指示対象(*référént*)の特定性(*spécificité*)・非特定性(*non-spécificité*)とのかかわりにおいて取り上げられるべきことを指摘している。

第5章は、前章末尾の指摘を承けて、不定名詞句における特定性の概念の、能う限り精密な分析にあてられ、指示・限定、特定・非特定の相関々係を分析して、次のように主張している。

a) 不定名詞句における特定性の概念は、不透明な文脈(*contexte opaque*)において非特定性と対立する特定性、即ち、不透明的特定性と、透明な文脈(*contexte transparent*)において唯一物性を獲得する透明的特定性とに二分さるべきこと。

b) この二分法は、特定性と指示性の関係のより正確な把握を可能にすること、即ち、定名詞句について指摘された指示的・限定的という対立は、これを不定名詞句について見た場合、透明な文脈におかれた不定名詞句にのみ観察され得る関係であること。

第6章においては、名詞句の指示機能と記述機能は、冠詞のレベルでは、前者は定冠詞の、また、後者は不定冠詞の果すものであることを事例分析によって論証し、併せて、この主張が、定冠詞の本質を指示にではなく唯一物存在前提(*présupposition existentielle d'unicité*)に求めるDucrot(1972)との対立を意図したものではなく、かえって、その止揚として、視点のいつそうの妥当性を求めた結果であることを指摘し、傍証として、対話のストラテジー(*stratégie discursive*)としての不定冠詞の用法を挙げている。

最終章である第7章は、冠詞とともに、名詞句の機能分析に重要なかかわりを有する関係詞節の問題にあてられ、制限的關係詞節と同格的關係詞節に関する現行一般の分析乃至定義を批判的に検討し、前者は主として指示機能を、後者は記述機能を担う関係詞節に他ならないことを論証している。

審 査 の 要 旨

本論文は、1960年代後半に注目され始めた名詞句における指示性の問題を基底に据え、この観点から、名詞句のもっとも重要な要素である冠詞と関係詞節との統辞論的特性の分析を通して、フランス語の名詞句における指示性・記述性、特定性・非特定性の相関性の実態を解明し、体系化しようとした意欲的な研究である。

総体的に言えば、本論文は、部分的問題点に関する、これまでの諸家の説を綿密に検討し、その何を採り、何を捨てるべきかを、有効な論拠に立って明らかにし、また、こうした問題点のそれぞれが、筆者の想定する一つの体系化のなかで、いかなる位置を与えられるべきかを明快に示している。筆者の立場の、この堅固さ、明快さは本論文の大きな特色であり、本論文が、問題の包括的な研究としては、先駆的なものであることと相俟って、本論文を高く評価し得る理由をなしている。

また、部分的に言えば、第1部では、今日なお、フランス語冠詞論を代表するG. Guillaumeの冠詞論における*extensité*の概念は*pré-extensité*と*extensité*とに二分さるべきであるという筆者の主張(第1章)は、単に本論文にとっての理論的必然であるにとどまらず、今後のフランス語冠詞論にとっても、常に指標性を有するであろう重要な創見であり、また、この*pré-extensité*/*extensité*を起点として構成される「冠詞の時間・論理的体系」(第2章)は、言語的事実により即した、フランス語冠詞の新たな体系化の試みとして注目すべき創見であろう。

第2部においては、特に、不定名詞句の特定性を論じつつ、従来、未分のまま放置されていたこのでの特定性を、不透明的特定性と透明的特定性とに二分すべきことを提唱している(第5章)のも重要な発見である。

最後に指摘しなければならないのは、筆者の問題意識の明瞭さを示す、適切かつ豊富な例文の採集であり、それによって得られている論述の実証的性格である。

もっとも、細部について疑義なしとはしない。一例のみを挙げれば、筆者の言う「冠詞の時間・論理的体系」(第2章)に拠って考えるとしても、 ϕ Nの本質が「ディスクールのレベルにおける非範疇化」、即ち、名詞から形容詞への機能の移行であり、したがって、無象(*amorphe*)にして、「非指示」的であり、これに対立して*le* Nが観念的個体の構成であり、その「指示」であるならば、両者は次元を異にする。そこでは、 ϕ Nは固有に*pré-extensité*に属し得ても、*le* Nは*pré-extensité*から*extensité*への移行過程を占める中間位と見るべきであろうし、したがってまた、*le* Nは固有に*pseudo-généricité*の領域に属し得ても、 ϕ Nは*généricité*(/*non-généricité*)の観念が構成される「以前」の領域に属するものとして、*pré-générique*(/*pseudo-générique*)でしかあり得ないであろう。

また、論文の構成について言うならば、「ゼロ冠詞」を扱った第3章は、その内容の補足的性格によって、論述の流れに、ある種の中断を生ぜしめており、これはむしろ、たとえばAppendiceの形で論文の末尾に回す方が適当であったように思われる。

さらに、第2部で扱われている問題が、直接にフランス語の名詞句のみにかかるものではないという事実からすれば、談話における情報構造という、より大きな観点からの考察、冠詞を有しない他言語、特に日本語との比較などが行われていないのも惜しまれるところである。しかし、これらは残された問題としてよく、本論文が、現状のままで、自立的な、フランス語における冠詞と指示の問題に関するすぐれた論考として、学界に貢献し得るものであることを妨げるものではない。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。